引吐露駄句序

「英三郎！　今一度太刀を取れ！　故意に勝を譲ったと見える。謀は許さぬぞ！」苛ついた斧柄脆齊の声が、道場の板の間一杯に響き渡る。

江戸は根津権現裏。神変無双流指南、斧柄脆斎（おのつか　ぜいさい）は、百に近い門弟を抱えた高名な剣客であった。今日この道場では、後継者の座をかけた重大な内試合が執り行われている。

脆齊の道場では年に一回、亥の月亥の日、つまり御玄猪の祝いに恒例として、試合を催すしきたりがある。その試合で勝利した者には、栄誉を称え脆齊秘蔵の名刀が一時佩刀を許される。「女護の刀」と称せられる、大小二振りの刀はそれぞれ、大刀を「恐色」小刀を「好色」という。この二振りを所持するものは、武運長久、日の本開

山の栄光を得ると言い伝えられ、武芸者の間では名の知れた宝物である。しかし、名刀には得てして持ち主に悪い影響を与えるものも少なくない。この女護の刀にも呪われた恐ろしい力がある。二本一緒に所持していれば恐れるようなことは何も起きないのであるが、一度番が割かれると名刀転じて迷刀となり、大変なことが起きるのだ…。

さて、今日はその年に一度の試合の日なのだが、どうしたことだろう？門弟たちの目の色がいつもと違う。皆一様に血走っている。とても、恒例行事に参加する意気込みとは思われない。その訳は、昨夜突然脆齊が言い出した無茶なひらめきによる。何と、今日の試合の優勝者は、女護の刀の一時佩刀を許すばかりか、道場の後継者に認めるというのだ。するとつまり、優勝者は斧柄家へ婿入りし、根津小町と評判の高い脆齊の一人娘、ゐ弥代殿を娶ることになるのだ。自然、若人の鼻息は荒かった。

敗北する者、勝利の雄叫びを上げる者。試合は順次決着していった。上座の脆齊は若者たちのエネルギッシュな立ち合いに満悦の表情であったが、奥向きへと通じる

杉戸を僅かに開けた娘ゐ弥代は、泣きはらした目で試合の様子を眺め、時折能天気な父を睨んだりしていた。深いため息を漏らし、奥の自室へと引っ込んでいく。

愈々、最後の立ち合い。脆齊の薫陶あつい素襖英三郎と毛利逸馬とが一騎打ちとなると、道場の賄女までもがそわそわと浮足立った。

「えい！」

「応っ！」

木刀の激しく交わる音。この段まで来ると、万座の門弟は皆素襖の勝を信じて疑わない。今日の優勝者…とは、誰が考えても実力的に英三郎以外あり得なかった。脆齊先生もお人が悪い。端から英三郎の勝を見込んでの思し召しであろう。分かっていても、勝負は時の運。万が一ということもある。皆そう考え必死に戦ったわけだが、結局予想通りの頂上決戦となったわけ。しかし、英三郎はいつになく押され気味。今日の逸馬は、ちょっと普段と様子が違った。

道場内の格付ではいつも英三郎の後塵を拝する逸馬。今朝、なにげに茶碗を覗くと、

其処に茶柱が立っていたのだ。ゲン担ぎの逸馬は大興奮。「今日は負ける気がせぬ！」等と、朝から張りきっていたが、事実負けなしで今の立ち合いにまで至ったわけで。凄まじい気合を発して、正眼で押す逸馬。道場随一の遣い手英三郎、どうしたことだ。気合に負けたのであろうか？一瞬の迷いを逸馬に看破され、小手を受けて木刀を取り落とした。騒然とする道場。

――と、まあそんな番狂わせがあって、英三郎を是非にも婿に欲しいと考えていた脆齊先生、この試合に物言いをつけたのだった。英三郎は、板の間に正座し平伏している。

「参りました。拙者が破れましたからには、毛利殿が一の勝者。先生、拙者には何の企てもございませぬ。」

「いいや、その方先ほど立ち合い中に考え事を致して居ったな！」

「ヘッ？」

実は、図星であった。そもそも、英三郎にはこの試合で優勝しては成らない理由があ

る。彼には既に決った女性がいるのだ。ここで何時ものように勢い余って勝ってしまうと、取り返しのつかないことが起きてしまう…。立ち合いの途中、なるべく痛くない負け方は無いものだろうかと考えた。が、その矢先逸馬の小手が思いっきり決まってしまいこの状態に。英三郎は、既に内出血がもったりと広がる感覚を身に覚えながら、必死に申し開きをする。

「滅相もございません。毛利殿に敗れましたは、全くもって拙者の力量不足…。」

「ええい、言うな！ただ今の試合は認めぬ。今一度立ち会うのじゃ！」

ゐ弥代は、父の怒号に驚いて再び様子を見にやってきたところ、あの英三郎様が困惑しきった顔で毛利様の足元に平伏しているではないか、それも、右の小手は色が変わるほどの打身。英三郎様が負けたのだ。すると、父の思惑は破れたことになる。

『私は逸馬様と…？』ゐ弥代はただただことの成り行きを見守るばかりだ。

「英三郎！」

それまで発声機能を忘れてしまったかのように突っ立って、先生と素襖のやり取り

を聞いていた逸馬が、間に入ってきた。
「先生のおっしゃる通り、先ほどの貴殿には邪念があった。あの油断があったればこそ、わしは小手を狙ったのだ。貴殿は、誘い込んでおったのだな。わしとて、作為で勝を譲られたとあっては面白くない。今一度、真剣に立ち会え！」
「……。」
先生と熱血漢毛利に挟まれ、追い詰められてしまった英三郎は、今にも泣きだしそうな勢いで「お許しくだされ。御免！」と道場を逃げ去った。
英三郎は一目散に玄関へと駆けて出た。玄関には何やら物騒な感じの浪人が居り「頼もう！」と声を掛けられてしまったが、振り切って下駄を鷲掴みにすると、
「と、取込み中につき、御免！」
と叫んで裸足のまま行ってしまった。後に残された物騒な浪人は、右手に大きな板を抱えて左手は懐中に飲んでいた。雲を霞と走り去る門弟の後ろ姿を、右目を細めて見送った。浪人の目は右の一方しか無い。左の方は刀疵につぶされていた。五分月代に、

垢じみた黒紋付。五ツ紋には襤褸布が縫い付けられている。とにかく気味の悪い男であった。
「ちぇ、何だいありゃ。取次が走って出てきたのかと思ったら、俺に脇目も振らずに行っちまいやがった。腐るなぁ全く。」
ぶつくさ文句を言って、男は勝手に道場へ入り込んでしまった。

逃げた英三郎を追いかけ、廊下へ出て行った門弟達がどっと逆流し、戻ってきた。そのあとを片目の浪人者がやって来る。見とがめて脆齊。
「ウウム、何奴じゃ。名を名乗れ！」
浪人はケケケと笑って脆齊に近づいた。
「姓は丹下、名は右膳。流儀は丹下流じゃ。」
「ほう、御姓名が丹下えっと…左膳殿で、流儀が丹下流。」
「いや、わし右膳だが。」

「ウウム、許しも請わずに、何用あって参った！」
「許しも請わずに…だと！ わしは最前から何度も声を掛けたぞ！ ちっとも取次が出てこぬので、入ってきたまでだ！」
浪人は小声で「何だか、調子が狂う親爺だなぁ。」と独り言を言ったが、仕切り直して、
「今日の試合の優勝者に手合わせが願いたい！ どいつだ？」
逸馬が木刀を握りしめ一歩前に出る。脆齊はそれを手で制して。
「フン、どこで耳に入れたかは存ぜぬが。本日は飽く迄内試合。他流の方はお断り申す。又、日を改めてお越し願おう。」
丹下右膳と名乗った男は、突然気がふれたのかと思うほど、激しく笑い出した。
「フフフハハハハハ！ 改めて出直せ？ 馬鹿野郎！ 俺は道場破りだぜ？おい。汝等！ こいつが見えんか！」
右脇に抱えていた馬鹿でかい板を門弟たちの前にぐいと突き出した。

「オッ、それは！」
「まぁさか、でかいまな板と勘違いするほど、腑抜けちゃおらんだろうな！」
言うが早いか道場の看板を放り出して、足で散々に踏みつけ汚した。
「な、何をする！」
「無礼者ッ！」
既に殺気立っている門弟達。ケケケと喉笛で笑う片目の浪人は、道場内を見渡し壁に掛った木刀を見つけると早速一本選び取り、振りをくれて目方を確かめた。重さが気に食わなかったらしく木刀を乱暴に投げ捨てると、別の一本を選び取って毛利逸馬の前へ戻ってきた。
「致し方ない。逸馬。」
「は。」
脆齊に許され、熱血漢毛利逸馬は、片目の浪人と対峙した。
「拙者、毛利逸馬。いざ、お相手いたす。」

「へへへ、礼儀正しい奴だな。気に入ったぞ？」
とかなんとかぬかしている相手を見ると、相変わらず左手を懐から出さない。逸馬は、構えた木刀をおろした。
「おい。立ち合いに、片懐手とは怪しからんな。左手を出さぬか。」
丹下は苦笑いすると、体を揺らして袖を振った。
「出来ねぇ相談だな。出したいがこの通り、生憎と無ぇのだ。」
「何？お主隻手なのか…。いや、それは、気の毒だなぁ…。」
「貴様…人の良い奴なんだなぁ。だが、遠慮すると痛ぇ目みるぞ？ さ、来い！」
逸馬は正眼に構え、丹下ににじり寄っていく。片手に持った木刀を斜に構える独特な姿勢に困惑し、間を開き様子を伺う。双方睨み合いの末、右へ右へと回ったが、遂に痺れを切らした逸馬が、気合もろとも右膳に面を下した。が、瞬間右膳はしゃがみ込むほどに体を沈め、見事な跳躍で逸馬の胴を斬り抜いた。
「ウッ！」

腹部を抑えて縮こまる逸馬。
あっさりと勝利した右膳は右手の木刀に、真剣さながら血ぶりを加えて、
「フハハハ、これで、今日の試合の勝者はわしだな。さぁて。」
不敵な右膳は、脆齊や門弟の視線を無視して上座へづかづかと上がっていった。彼が目指す先に有るものは「女護の刀」である。
「女護の刀は俺が預かるぜ？」

横紙破りの道場荒し丹下右膳は、毛利逸馬を打ち砕き実質上一の勝となってしまった。誰も想像をしない展開となってしまったが、決まりごとは決まり事。右膳と逸馬それぞれに、脆齊の手から女護の刀が一時託された。二人は脆齊の娘ゐ弥代の先導で、斧柄家の奥庭にある稲荷社へ参詣し、その後納の会となった。
宴席が始まる前、脆齊とゐ弥代は言い合いをしているようであった。台所の賄女は、下男の親爺と怪訝な顔を見合わせた。

「ほんに、お嬢様もお可哀そうに。旦那様の気まぐれにも、ほどがありますよ。」
「本来、今日の勝ち抜きが、お嬢様の御婿さんに決まる訳だったのだろう？　そりゃあ、誰が考えたって、素襖の若様が勝ち抜くと見込んでいるからの言い草で。師範代の大迫様ならいざ知らず、毛利様が決勝に残るなんて思いもよらない。その上まさか、飛び入り参加の化物浪人がその毛利様を下して優勝者然として居座っている。なぁ？　この場合。やっぱり、あの化け物がお嬢さんの御婿様になってしまうのかえ？」
「それがさ、聞いてあきれるよ。先生は、あの決め事は内輪に対する賞だから、他流には通ぜぬとおっしゃるのさ。」
「あきれもしない。当然じゃないか。」
「ところがお前、お嬢様だよ。お嬢様は、先生の余りにも無茶苦茶な婿選びに昨晩からご立腹で。この期に及び御自分のお言葉を覆すのは、武家として恥ずかしくないのかと偉い勢いで啖呵を切ってさ。」
「ふうん。まあ、先生の無茶ぶりは今に始まったことではないしなぁ。お嬢様の婿選

びに関しても、先方に好いた相手が居るのに強引に見合いをさせてみたり、御自分さえその気になると、お嬢様のお気持ちなんぞ全く意に介さない。お嬢様が楯突くのも当然の道理だあな。」

御玄猪の試合の後、納会の席は決まって無礼講なのだが、今日の門弟一同は全く楽しい気分になれなかった。と言うのも。ご息女ゐ弥代が酒を注しているのは例の道場破り丹下。毎年、優勝者にはお嬢様手ずから給仕をするのが習わしだ。

「これは、忝い…。」

酒が回り、一眼ことのほかに赤い丹下右膳。息女ゐ弥代の美しさに見とれている。

「今日の試合に勝つと、あの刀を拝めるとは聞いたが。ご息女から、この様な歓待を受けるとは知らなんだ。」

ゐ弥代の顔は晴れない。泣きはらした顔を化粧直して。どうにかこうにか座っていた。

「貴女ほどの綺麗どこが、俺のような者の酌じゃ辛かろう。怖がるこたぁねえ。ケケケ、安心いたせ。今にその酒を飲みきったら、ドロドロと引き上げる。」

怖らしい見た目とは裏腹に、案外思いやりのある言葉。先ほど脆齊相手に吠え付いていた同じ浪人とは思えない。ゐ弥代は、何か自分でも思いもよらない気分で、道場破りの顔を見た。相変わらず不気味だが、よく見ると愛嬌のある眉に、力強い目をしている。

不浄に立つと見せかけていつの間にか席を離れた右膳。そう、彼の目当ては「女護の刀」。道場破りとして侵入し、刀を奪う機を図っていたのだ。が、美しいゐ弥代に見つめられ、うっかり何をしに来たのか忘れるところだった。門弟や脆齊は酒に酔いしれている。守りが手薄の今ならば！

右膳は誰もいない道場へ侵入した。上座神前には、まごうことなき女護の二刀。忍び足で近寄ると、好色の入った錦の袋をまず口へ咥え、大刀恐色の袋を手に持つ。心の中で歓喜の声を上げた右膳は早速恐色の鞘を払い、その刀身を確認した。が、背後に人の気配を感じ、はっとして振り向く。暗がりの中一人の若侍が、門弟用の刀掛け

を物色していた。先ほど道場を飛び出していった英三郎。大切な腰の物を刀掛けに残してきてしまったことに気づき、試合が終わる頃合いを見計らってひっそりと回収に来ていたのだ。

「おい、そこにいるのは誰だ？何を致しておる。女護の刀を元に戻せ！」

英三郎の声に、驚くと同時に不敵な笑みをこぼした右膳。鞘を腰に差すと、好色を咥えたまま抜き身の恐色で英三郎に襲い掛かった。英三郎は武蔵野太郎靖國を抜き応戦する。

「貴様何奴か、その刀は当道場の宝。神妙に返したならば許して遣わす。が、手向いいたさばこの素襖英三郎、容赦はせぬぞ。」

「イヤアエ（訳：嫌だね。）オレワ、オエアオオラ！（訳：これは、俺が物だ！）」

激しく切り結んだ状態でやり取りをするが、相手は片手。口に物を咥えているので、何と言っているのか良くわからない。

「え、何だ？ 何だと申す？」